

主の降誕 夜半のミサ

2014.12.24 18:00

第一朗読 イザヤ 9・1-3、5-6

第二朗読 テトス 2・11-14

福音朗読 ルカ 2・1-14

クラレチアン宣教会 長崎 壮助祭

わたしたちキリスト信者は、クリスマスの前の四週間を待降節と呼ばれる準備期間として過ごしてきました。皆さん一人ひとりが様々な思いでこの御降誕の喜びの日を迎えられたことと思います。

イエス様の降誕は、時が満ちたこと(ガラテア 4・4)を示します。父である神が御自分の御子を与えることによりわたしたち全ての人にその愛を示すために選んだ時です。

今日は、この御子の派遣の「時」に至るまでの待降節中のわたしたちの歩みを振り返りながら、皆さんとともに神様のご計画とこの時への向き合い方について深めてみたいと思います。

待降節中の福音朗読は、神様の計画が人々の期待とは大きく異なった方法で実現していったことをわたしたちに教えます。

たびたび洗礼者ヨハネが登場して、イエス様について証しをする箇所が見られました。そこで先ずこの二人のお母さんを比べてみたいと思います。

福音書は洗礼者ヨハネの父ザカリアと母エリザベトについて「二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めを全て守り、非のうちどころがなかった」(ルカ 1・6)と伝えていますが、エリザベトは年齢を重ねていましたが、このことは当時のイスラエル社会では人間的に成熟した女性と考えられました。

一方マリアはどうかというと、家柄については触れられておらず、まだ年端もいかない少女であったということは、未熟と見られてもいたしかたなかったとも考えられます。

このように家系や年齢などに関する当時のイスラエルの社会通念からすると、救い主の母としてふさわしいのはマリアよりもむしろエリザベトの方でしたが、これらに反して実際に神様が最愛のひとり子の母として選ばれたのはマリアの方だったのです。

神様は、わたしたちが「無原罪」と呼ぶ清さゆえマリアを選んだのですが、その清さというものは外面だけからは見る事が出来ないものなのでしょう。

次に、今日読まれた福音書にある通り、ベツレヘムの乳飲み子が誰であるかをはじめに知らされたのも、羊飼いたちでした。羊飼いは当時の社会では身分が低く、人々から軽く見られていた人たちです。

そして羊飼いが生まれた救い主を発見した場所も、人々が期待する場所とは大きくかけ離れた場所です。救い主にふさわしい一流の旅館とは言わないまでも、せめて普通の人並みに家の中で生まれていることを期待するでしょう。ところが、父である神様が最愛のひとり子の誕生の場に選ばれたのは、「飼い葉桶」の中だったのです。しかも、その姿は無防備な赤ちゃんの姿でした。

今日この場には、初めて教会に足を運ばれた方もいらっしゃるかと思いますが、このように、わたしたちキリスト信者の信じる神様は、力づくで人を支配する神様でも、「どうだ」とばかりに自分の威厳を見せつけて無理やり従わせるような神様でもありません。

子である神イエス・キリストは、人々が自由に受け入れやすいように人間の姿、それも最も弱い赤ちゃんとして現れたのです。そして、ベツレヘムで生まれたみどりごに出会うために必要なことは、知恵や肩書きではなく、幼子のような単純で素直な心であることを、聖書は教えます(ルカ 10・21)。

また、わたしたちはよく日常生活の会話の中で、隣人に対して「あの人に対しては心を開ける」あるいは、「あの人に対しては心を開けない」という言い方をします。信頼できる人であれば自分の胸の内を包み隠さず語ることができる、という意味です。

救い主である神様が赤ちゃんとしてこの世にお生まれになったこと、誰かの世話を必要とする一番無防備な姿として生まれたことは、神様が全ての人に愛に満ちたその心を最大限に開かれたことのあらわれでしょう。

さて、これだけ大きなお祝いの日であるのに、ごくごく個人的なお話しをすることにはためらいも感じますが、今回のクリスマスを迎えるにあたってのわたしの個人的な体験を分かち合わせていただきたいと思います。

わたしはこの二年ほど風邪で寝込んだことはなかったのですが、三日前の日

曜日の晩から高熱に見舞われ、昨日まで完全にダウンしていました。幸いインフルエンザではなくただの風邪だったので、今日は元気にこの場に立つことができたのですが、病気で寝ている間、ベッドから起き上がれないでうなされて  
いるわたしに、修道院の後輩の兄弟たちが代わる代わるに食事を運んでくれたり身の回りの世話をしてくれました。

わたしの部屋はあまり整理整頓が出来ておらず、神学校の勉強とはあまり関係のない本が積み上げてあり、正直あまり人に見られるのは照れくさいのですが、慌てて片付けるだけの気力も体力もなかったのもそのままにしておきました。クリスマス直前で、皆がそれぞれの準備があったはずですが、兄弟たちは面倒くさがることなく本当に心を込めて世話をしてくれました。

わたしにとってこのことは、自分の無力さをあらためて知り、普段の生活の  
だらしなさを反省する機会となりました。そして何より、兄弟の善意や「キリストの愛」に駆られた行いを素直な気持ちで受け入れることが出来たと思います。

修道院で暮らしている者であれば、聖堂で居住まいを正して「よく祈れた。  
いい準備が出来た」というクリスマスの迎え方が理想なのかもしれません。しかし、したかったことは実行できなかつたけれども、兄弟を通じて示される神様の愛を体験することが出来たということは、わたしにとって何にもましていい準備になったと思います。

わたしと同じくこの御降誕の時を「十分に心の準備ができなかつたな・・・」と  
思っていらっしゃる方もいるかと思います。しかし、自らの御誕生の場を馬小屋に選ばれたように、イエス様は、いまだ整理出来ずに問題を積み残したままのわたしたちの心の中でもわたしたちを待っておられるのではないのでしょうか。

飼い葉桶に眠るみどりごの寝息に耳をすませ、素直な心で「イエス様、あなたは全てをご存知です。どうぞ来てください」と語りかけることが、わたしたちのために心を開いてくださった神様に対してとるべき態度なのかもしれません。